
新潟歴史資料救済ネットワーク の取り組み

2005. 2. 12

シンポジウム

「新潟県中越地震からの文化遺産の救出と現状」

新潟大学人文学部 原 直 史

1. いくつかの前提

- 阪神淡路大震災以来の史料ネットの活動
 - ボランティア団体としての「越佐歴史資料調査会」
 - 新潟県文書館が定着させた「現地主義」
 - 7.13水害の経験
-

2. 当初の活動と課題(1)

- ネットワークの形態と事務局の所在
 - 県立文書館ないし新史料協が核となる場合と大学が核となる場合の選択肢が存在
 - 例えば「越佐」でも院生より史料保存利用機関職員が中心となる新潟県の現状
 - ボランティアの動員、募金の受け入れなど行政機関では困難な部分を考慮して大学に事務局を
-

2. 当初の活動と課題(2)

■ 活動の範囲

- 大規模かつ深刻な被害→生命と生活を守ることが第一→どのように行動にはいるのか？
 - 活動は長期化する見込み 早期にバテてはいけないう→あれもこれもはできない
 - 行政ルート、地元自治体の判断を重視し、要請によって動くこととし、当面は宣伝に注力
 - 文書史料に限定しない方向
-

2. 当初の活動と課題(3)

- 財政的裏付け
 - 当初はボランティア＝手弁当という認識
 - 活動にはいるとすぐに資金は必要であることが判明
 - 長期的には課題も
-

2. 当初の活動と課題(4)

- 情報交換と意志決定
 - 兵庫・鳥取・宮城などのWeb上の情報がおおいに役立つ
 - 連絡・ボランティア募集などはメール中心(電話や郵便では困難)
 - ネットでは情報交換は出来ても意志決定は困難
-

3. 活動のスタイル(1)

■ 救済活動と宣伝活動

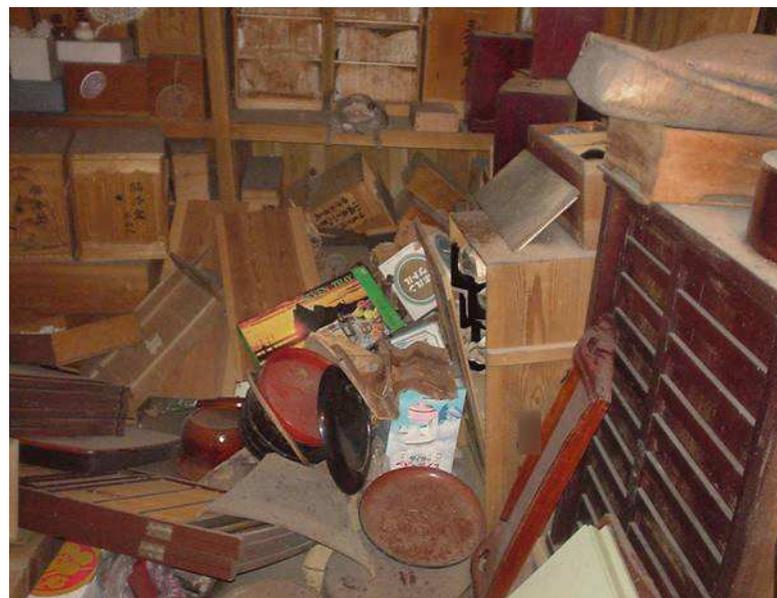
- ネットワークの活動の認知、歴史資料が貴重な地域の財産であることの認知、の両面で宣伝活動が重要
→救済活動との両輪
 - マスコミ対応・学会等への参加
-

3. 活動のスタイル(2)

- 活動のサイクル
 - 救済の申し出→調整 下見など



-
- 参加者の募集とボランティア保険
 - 活動当日の役割分担 時間配分
 - 活動報告 後始末





4. 現状での課題(1)

- 受け身の活動からの脱却
 - 現状では被災地全体が必ずしも見渡せていない
悉皆調査ではない
 - 十日町市・長岡市など「体力ある」自治体とのさらなる
連携
 - それ以外の自治体での活動の模索(とくに確認調査)
-

4. 現状での課題(2)

■ 中長期的展望

- 雪解け以降が勝負となるが、救出資料の一時保管先が最大の問題
 - 現地主義を貫くには現地での保管スペースが必須
 - 「地域の文化遺産を守る」ことから何が見えてくるのか→研究とその地域への還元が課題に
-

4. 現状での課題(3)

■ 宣伝の方向

- 時間を追う毎に例えばマスコミ対応の質は変化する
 - 当初は単なる情報紹介→ある程度落ち着いた段階では当然独自のストーリーに基づく番組作り
 - 主体的に関わっていくことが課題に
-

4. 現状での課題(4)

- 総合的なネットワークへ
 - 現状では活動の範囲に濃淡がある
 - さらに多くの自治体・大学・各種団体・個人がゆるやかにでも繋がれる形が理想
 - 情報の共有がポイントだが、必ずしも容易ではない
-